

## Richard Wright, *Native Son* における “crystallized modes of expression”

— ビガーを殺した「言葉」 —

大 武 佑

*Native Son*<sup>1</sup> (1940) は、アメリカ黒人であることを生涯執筆活動の原動力としたリチャード・ライト (Richard Wright) の代表作である。作品中、主人公の黒人青年ビガー (Bigger) の内面や行動を描写する際に多く用いられる単語に、feel (初出4) や feeling (初出14) がある。感情という「暗く不鮮明な」(433) ものを他者に伝達するうえで、言葉という「客観的で実体のある形式」(399) に変換することは不可欠な過程である。ライトは、本作品執筆の経緯などを記した “How ‘Bigger’ Was Born” で、この作品には「紙の上に文字通り吐き出すまでは自分でも認識していなかった意味がある」(434) と述べている。そして、「紙の上に吐き出す」作業を経ることによって、作品の題材を「意識的に自らの所有物とする」(434) ことができたという。「感情は主観的で」(434) 明確な形を持たないため、言葉という「客観的な装いを纏うことでのみ、それらを伝達できる」(434) ということだ。ここでライトは感情に“ことば”という形式を与えることの意義を表明している。

ライトにとって、自分の考えや感情を小説というテクストの中で言語化することは、黒人としての自分の内面を、黒人差別に対するプロテスト小説<sup>2</sup>として世間に発表するという意義をもつだけではない。A. Rampersadが本作品の前書きで、「ある面では、警察記録をもとにした貧弱なメロドラマ」(Rampersad 19) と評しているように、この物語には、単純なプロットと、感傷的で荒削りな表現がたびたび見られる。しかし、「同時に、人物の意識を解明するドラマ」(19) でもあり、「イデオロギー的、政治的な目的」のために「武器としての言葉」(13) を用いようとするラ

イトの視点や主張が前面に押し出された作品でもあるのだ。

白人による抑圧にもがくビガーの行動と内面を追う本作品は、アメリカに生きる黒人にまつわる、人種差別や共産主義との関わりといった問題を浮かび上がらせるだけではない。人間全体がもつ精神に関する問題を喚起するテキストとしても読める。ビガーは、白人女性を殺害し逃亡の末に捕えられた後も、自分の内面を表現するための言葉を渴望するが、手に入れることができないまま死を迎える。彼を弁護する白人弁護士マックス (Boris Max) は裁判の場面で、ビガーら黒人は highly crystallized modes of expression (399) (高度に具現化された表現の様式) を持つことができず、この事がビガーの一連の犯行に関わるのだと語っている。白人からの肉体的、精神的な抑圧を受けるビガーら黒人にとって、言葉を用いて自らの感情を秩序立てることは禁止されているに等しい。白人にとっては明確な「具現化された」(crystallized) 表現様式ではあっても、ビガーら黒人には、この「結晶化した」(crystallized) 様式は、透明で認識できるものではなく、手に入れる事のできないものとして存在する。マックスによれば「具現化された表現様式」とは、「芸術、科学、産業、政治などの社会的活動」(399) といったさまざまな形態を意味する。“highly crystallized modes of expression” と称されるこれらの社会的な諸活動は、白人の支配する世界において黒人には許されない。

では、ビガーが無意識のうちに渴望する「crystallizeされた表現形式」とは、どのように彼に作用しているだろうか。動詞 crystallize とは、「構造をもった結晶へと変化させる」という意味の他に、「明確または具体的で不変な形状を、何か漠然とした、流動的な性質に与える」と定義されている<sup>3</sup>。

本稿では、まず、白人に支配された世界で、「高度に具現化された表現の様式」を、知らず知らずのうちに必死に求めるビガーの「生」(life) が、液体のメタファーで語られていることに着目し、つかみどころのない自らの感情に「言葉」という形を与えようともがく姿を読み取る。次に、液体のようにつかもうとすると指の間から零れ落ちる「生」に確固とした形状を与えようとするビガーの試みに支配的な圧力を与える「白い力」(114) を分析する。そして、作品の結末で暗示されるビガーの死は、「武

器としての言葉」を求めたことによるものであるとし、人間が言葉を操り、言葉を所有することの不可能性を探っていく。

## 1. 液体としてのビガーの「生」

These were the rhythms of his life: indifference and violence; periods of abstract brooding and periods of intense desire; moments of silence and moments of anger — like water ebbing and flowing from the tug of a far-away, invisible force. (29、下線部は筆者)

ビガーの「生」(life)のリズムは、「まるでみえない力の引力によって満ち引きする水のように」と表される。目に見えない力に対しては無力で、周囲に対する静かな無関心と激しい暴力という両極を行き来するのが、ビガーの「生」なのである。このように不安定な生活の中にいるビガーが好んで映画館に行く理由を、ライトは、「意識の焦点を定め、エネルギーを排出 (drain off his energies) できるぐらいに強烈な刺激を求めている」(28) ためであるとする。そして、エネルギーの放出を求めているビガーにとってメアリー殺害は、感情を言語化し、文脈をもった物語として意味を持たせることに対する欲求を生じさせるきっかけとなった。それ以前のビガーには見られなかった生命力と行動力をもたらしたメアリー殺害は、黒人による白人女性の殺害で、白人社会における重罪であり、彼には死刑判決が下される。死刑判決を受けたビガーは、lifeやfeelingとしか書かれていない彼の「生」を、液体の喩えをもって意識するようになる。彼は、メアリー殺害によって「人生が彼のために満たした器を空け」(311)、その結果、液体のような「生」のエネルギーを空にするということが無意味であったと気づく。しかしその器は再び満たされており、「中身が吐き出されるのを待っている」のである。死に直面したビガーの「生」は、water、morass、the dark face of ancient water (274) という、つかみどころのない、暗い液体のイメージで描写されている。ビガーにとって、

メアリー殺害という行為の理由を語ることは、つかみどころのない自分の人生の解明につながっている。彼が殺害の理由を言語化できないのは、白人弁護士のマックスを相手に話したくないからではない。牢獄の中でビガーについてライトは、「それ（メアリー殺害）を語ることは彼の全人生の真相と関わっていた」（308）と解説している。ビガーは自分の内面を声にのせて語ることを強く欲しており、何度もマックスに、殺害の理由を語ろうとするが、その試みが果たされることは最後までない。

自分の行為とそれと密着した自分自身の「生」は、言語という形状へと変換しようとするそばから液体のように意図していた内容から漏れていき、ビガーの口からは、語りたいと欲しながらも、語りたい事柄は発されることはない。ジュディス・バトラーは、言葉を用いることは、主体的な行為に見えて、実は言葉に従属することと表裏一体である事を指摘している。バトラーは、言語を用いることを「名付け」の行為として、言語を用いるということが主体に及ぼす力を、「場所と時間の中で固有性を与える権力」（29-30）であると述べている。空間と時間を浮遊する掴みどころのない主体を、一定の位置につなぎとめる「いかり」としての役割が言葉には備わっている、ということである。しかし、その一方でバトラーは「言語の中で自分自身を探そうとすればするほど、探しているというまさにその場所で、自分自身を見失う」（Butler 30）のだと、人が言葉を用いることから生まれる排除の感覚を論じてもいる。

Thus, as Benvenist has shown, the very conditions of the possibility for becoming as “I” in language remain indifferent to the “I” that one becomes. The more one seeks oneself in language, the more one loses oneself precisely there where one is sought. (Butler 30)

言語の中で確立された「私」と、実際の「私」との間には埋められない溝がある、ということである。言葉を用いて表現しようとするほど、表現する対象からかけ離れていく感覚は誰もが感じたことのあるものではないだろうか。しかし、黒人として白人から生そのものを制限されて生きてきたビガーの感じる疎外とは、現代の私達が感じるそれとは比較

にならないものなのではないか。白人によってあらゆる行動の機会を奪われた黒人の状況を嘆くビガーのせりふは、ビガーに似つかわしくない饒舌さにライトの影を感じさせるものではある。しかし、白人に支配され、自分の“生”さえも明確に掴むことのできない疎外感が明確に語られている。

“Every time I think about it I feel like somebody’s poking a red-hot iron down my throat. Goddammit, look! We live here and they live there. We black and they white. They got things and we ain’t. They do things and we can’t. It’s just like living in jail. Half the time I feel like I’m on the outside of the world peeping in through a knot-hole in the fence....” (20)

「まるで熱く焼けた鉄をのどにつっこまれているみたいだ」と友人のガスに語るビガーは、自由に言葉を発することができないことへの苦しみを、メアリー殺害以前においてすでに表明しているのである。

液体のような自分の感情を注ぎ込み、構造と意味を持った言葉へと結晶化すること、そしてそれを周囲の世界に向けて発することができないために、ビガーは *crystallized modes of expression* を求め続ける。だが、「高度に具現化された表現の様式」を手に入れ、利用する権利を黒人は持たない。液体のように定まった形を持たず、一つの場所にとどまれない感情や生そのものをビガーが言語化できないのは、言語を用いるための「表現の様式」を手にする権力を白人から剥奪されていることによるのだ。

## 2. ビガーと「白い力」との *masturbatory* な関係

ビガーを支配する力は作品中で、「白い力」と表わされている。黒人と白人は明確な境界線を境にして生きており、その境界を越えることがない限り黒人は白い力を恐れる必要はないが、その力から逃れる事はできない。

As long as he and his black folks did not go beyond certain limits, there was no need to fear that white force. But whether they feared it or not, each and every day of their lives they lived with it; even when words did not sound its name, they acknowledge its reality. (114、下線部は筆者)

ビガーは黒人であるがために、この「白い力」の影響を受ける対象であることを強いられている。ビガーにとって「白い力」は、ただ白人の存在を意味するだけではない、目に見えず、言語化もできないものである。しかし、彼が自分の肉体をコントロールすることさえ抑圧する、現実味をもった力として彼に作用するという不気味な支配力をもつ。このような目に見えない潮流のような圧力によって黒人は街の片隅に追いやられるのである。白人によって住む場所まで規制されているビガー達黒人は、言葉を用いるという根本的な人間的活動においても、言葉を用いる権利、つまり authority をあらかじめ白人によって剥奪されている。肉体的な規制を受けながら、ビガーは言葉を発することなく、無言の状態のまま、白い力の存在を認可させられている。

白い力はビガーの肉体にどのように作用しているのだろうか。ビガーの新しい仕事の雇い主となった白人のドルトン氏は、ビガーが話すことさえも彼自身に決定させない。ビガーにとって白人とは、「大いなる自然の力」(114) として存在するものであり、ライトは、黒人にとって白人とは「人間ではなく」太刀打ちのできない自然界から及ぼされる力と同様であると述べている。また、アンドリュー・ハッカーは、アメリカを「白い国家」(4) と呼び、アメリカでの黒人の置かれた状況を「法的拘束力のないアメリカ版アパルトヘイト」<sup>4</sup>とまで言っている。ドルトン氏から話しかけられることを待つだけのビガーは、“Yessuh” という自分の返答が、本意に自分の口から発せられるのを聞くだけの、受動的な存在となっている。本来、声とは自分の意思によって発し、それを聞く相手がいることで文脈をもち、意味を成すものである。しかし、ビガーは「白い力」によって心身を支配されているために、言葉を自分の声にのせて発するという主体性を奪われているのだ。

ビガーの持つ受動性は、ゲイツが指摘する黒人作家作品の登場人物に備わる特徴でもある。ゲイツは、ゾラ・ニール・ハーストンとライトには、他の黒人作家にはない共通点があるとし、それが声の存在であると分析している。白い力の支配を受けながら、自分の声の探求を行うビガーは、白い力によって音量を絞られた無声の存在だ。

ゲイツは、作品のタイトルにその存在が示されているビガーの特徴として、“voicelessness”と“powerlessness to act” (68) を挙げている。声を持たないために社会から認知される言語を持たず、したがって行動するにも無力な存在となるビガーは、白人社会では“不在”である。ゲイツによれば「社会に反抗するが最後まで声を持ってない」存在なのである。そのようなビガーの行為は、彼と彼の行為を受け入れる相手の不在により、一方的なものとならざるをえない。ドルトン家の一人娘・メアリーの殺害も、ビガーによる一方的な行為と言える。この殺人は「恐怖と恥」(114) という感情を与える「白い力」に対して彼が身を守ろうとした反応である。

ビガーから言葉をうばう「白い力」が、この場面では盲目のドルトン夫人によって象徴されている。ビガーは、泥酔したメアリーを彼女の部屋に運んだ時、物音を聞いてやってきた盲目のドルトン夫人が現れる。ようやく婦人が去って、ビガーが気づいたときにはメアリーは死亡していた。ビガーは、自分の肉体を用いた暴力的な行為を通して白い力に抵抗しようとするが、その行為が招いたのは、自らの意思に反した不本意なメアリーの殺害であった。

ここで注目したい点は、メアリーの殺害の行為によって、ビガーの視覚に変化が起きているということである。ビガーは、メアリーの様子を見に来た夫人がドアのそばに立っていることに気づき驚愕する。初め、ビガーの目に夫人の姿は、ぼんやりとした白い影としてしか映っておらず、それがドルトン夫人であるとビガーが認識するには時間がかかっている。

He turned and a hysterical terror seized him, as though he were falling from a great height in a dream. A white blur was standing

by the door, silent, ghostlike. It filled his eyes and gripped his body. It was Mrs. Dalton. (85)

ビガーは、メアリーが目を覚まし、婦人に自分の存在を知らせる事を恐れて、彼女の口を夢中でまくらで押さえつける。はじめドルトン婦人の姿は、「白くぼやけた状態」(85)で「亡霊のよう」であった。しかし、恐怖のあまり全身の力でメアリーの顔を枕で押さえつけ、彼女が死亡した後には夫人は明確な姿として描かれ、ビガーは夫人の姿をはっきりと見ている。メアリーを押さえつけている最中、ビガーの目に映る夫人は、次のように描写されている。

He could see Mrs. Dalton plainly now. As he took his hands from the pillow he heard a long slow sigh got up from the bed into the air of the darkened room, a sigh which afterwards, when he remembered it, seemed final, irrevocable. (86、下線部は筆者)

「ドルトン夫人」がビガーの行う“見る”行為の目的語として文章の中に入っている。つまり、白い力が及ぼす影響に対して受動的であるしかなかったビガーが、見るという行為の主体となっているということである。メアリー殺害に伴うドルトン婦人の見え方の変化は、明確に視覚化されないために言語化することのできなかった「白い力」の存在が、ビガーが視覚的に認識し、言語化できる存在となったことを示している。メアリー殺害はビガーが行為の主体となるきっかけとなった象徴的な出来事なのである。

マルコス は、ライトが黒人を、受け身の犠牲者として描く事を望まなかったと論じている。ビガーは、「制限された環境のなかで、行為の主体となった。つまり行動の選択ができ、自分の行動に対する責任を引き受ける能動的な主体となった」(Marcos 128-29)ということである。しかし、ビガーの視線の対象となったドルトン夫人は盲目であり、彼女はビガーの存在には気づかずに部屋を離れていく。“見る”行為の主体となったビガーだが、夫人との関係もまた、彼女が盲目であることから、夫人にとっ



てビガーは不在であり、ビガーから婦人への一方的な認知だけで成り立った関係でしかないのである。

メアリーが死んでいることに気づいたビガーは、自分を“a Negro murderer”や、“a black murderer”という呼び名でよび、そのように自分の行為を名付けることで自分の行為を認知している。自分を「黒い殺人者」と呼ぶことは、白人の文脈で自分の行為に意味づけを行っているということをしめしている。不本意にもメアリーを殺害したビガーであるが、彼が黒人であるがゆえに、白人が自分に対して振るうであろう、白人の文脈によってmurderと自分自身を規定し、彼の意志とは無関係に、自動的に意味づけされる存在となるのである。

マックスは、ビガーと社会との関係を、ガールフレンドのベッシーとの関係と同様に、「独りよがり (masturbatory) な関係」<sup>5</sup>であると述べている。

欲望の対象とビガーとの一方的な関係を象徴するのが、ビガーが友人ジャックと映画館の暗闇でマスターベーションをする場面である。マスターベーションとは、その行為の主体と欲望の対象との間にある物理的・心理的な距離を一時的になくす行為であり、代替物を通すことでのみ欲望を充足させる行為であるといえる。1940年の初版から削られ、書きかえられた二人の自慰行為の場面は、お互いのガールフレンドのことを言い合いながら、行為に及ぶ二人の会話から成り立っている。石川弘義は、マスターベーションという言葉について「手を汚す」という意味のラテン語に由来すると述べている。ビガーと友人のジャックは、その場にはいない相手の事を話し、行為の相手なしに自分の手を使って行為を行う。発話行為と性行為というふたつの行為の主体であるように見える二人であるが、どちらの行為も、対象が不在のために独りよがりなものとなっているのである。

ビガーの行為は、彼の欲望の対象に直接作用を及ぼすことのない、自己完結的なものなのである。そのため、ビガーと欲望の対象との距離は顕在化し、ビガーに社会からの疎外感を与えることとなる。自分を取り巻く世界に対して受動的であることを強いらられるビガーは、作品中で形を変

えながら何度も社会から除外される感覚から逃れようとしている<sup>6</sup>。しかし、彼の行為は、白人の支配する社会においては一方的で、masturbatory (402) なものでしかない。その現れの一つが、映画館での自慰行為だった。

メアリー殺害後のビガーは逃亡の末、白人によって逮捕、投獄されるが、メアリー殺害の真相を知る唯一の人物として、周囲の白人達に求められ、事件の詳細を説明する立場を獲得する。ビガーだけが語ることのできる立場にいるということだ。白人の私立探偵ブリトンに、メアリーの遺体発見時の状況を説明するよう求められたビガーは、自分が作り出した筋書きを語り、相手に情報を与える立場にいることに興奮している<sup>7</sup>。メアリーの死亡時に何が起きたのかは、彼しか知り得ないのであり、彼の証言だけが事実となる事を許されているのである。メアリー殺害は、ビガーに、言葉を用いて物語を生み出すことへの欲望を目覚めさせる出来事となった。

### 3. crystallize することの不可能性

自分自身の感情を言葉におきかえることで感情の本質との間に距離が生まれ、正しく表現されていないような違和感が生まれるという現象は、言葉を用いる人間には、だれにでも起こりうることである。ビガーは、メアリー殺害の理由をマックスに語ろうとする。彼は「むき出しの空間からメアリー殺害の理由、という明確で確固としたものを切り出そう」(348) ともがいている。しかし彼には液体状の自分の内面を言葉という solid な結晶に crystallize することはできない。ここで示される crystallize の不可能性を暗示するのが、飛行機が空に商品の広告として描いた”GASOLINE” という煙文字である。

The plane sailed and dipped and spread another word against the sky: GASOLINE.... “Use Speed Gasoline,” Bigger mused, rolling the words slowly from his lips. “God, I’d like to fly up there in that sky.” (17)

煙で文字を描いている飛行機を見上げるビガーは、憧れとあきらめをもって、自分には与えられることのない機会に思いを馳せている。空に描かれた文字が示す「ガソリン」とは結晶化 (crystallize) することのできない液体である。同様に、人間の「存在」や「感情」もまた、本来は流動的で一定の型に収められるものではない。しかしながら、社会における人間それぞれの存在や役割は、「言葉」によって一定の形式に分類され、社会の中で機能するものである。その「言葉」をビガーが持つことを禁じ、独占するのが「白い力」だった。ビガーが見上げた「ガソリン」という文字は、「言葉」を持たないために社会における自らの存在さえも具現化できないビガーを、作品の冒頭部分ですでに暗示しているのである。

固体化しない液体であるガソリンとは、物事を動かし、生産の原動力となるだけでなく、容易に引火し、爆発を起こす危険性をも併せ持つ物質である。死刑が言い渡されたビガーは、死を覚悟した様子でマックスに話し続ける。“I know what I’m saying real good and I know how it sounds.”と語るビガーは、自分の発した言葉の意味を自覚しており、聞かせたい自分の声を、それを聞かせる対象に向けて発し、相手がどう聞いているのかも把握している、という状態にある。それまでは一方的で masturbatory であったビガーの欲望とそれにもとづく行為が、死に直面したこの時にだけ、masturbatory ではなくなったのだ。マックスはこのようなビガーと彼の言葉に対して恐怖を感じている。マックスはビガーを、“a part of a furious blaze of liquid life energy which once blazed and is still blazing in our land. He is a hot jet of life that spattered itself in futility against a cold wall.” (399) と評している。ビガーは「液体状の生エネルギーがあげる炎」と表わされるが、白人と同様にアメリカから生まれた土地っ子、“native son”でもある。しかしアメリカの黒人は、同郷であるはずの白人によって抑圧されており、マックスは、このようなビガーがもつ強烈なエネルギーを感じ取っているのである。ビガーは飛行機を見上げながら「たぶん俺たちが（飛行機を）飛ばすのを彼ら（白人）が嫌がるのは正しい」「なぜって、もし俺が飛行機を飛ばしたら、爆弾を持って確実にあいつらに落とすだろうから」(17) と友人のガスに話している。ビガーには、突如として引火し、爆発を起こしかねないガソリン

のような破壊の可能性をもつエネルギーが備わっており、白人であるマックスはビガーに対して、アメリカ社会が潜在的にもつ恐怖を抱くのだ。

マックスにすら恐怖を抱かせた、ビガーに備わるエネルギーとは、言葉を用い、そこに文脈を作り出すことへの欲求がそのエネルギー源である。ビガーは、マックスに語ろうとすることによって、自分の感情と存在に言葉という実体のある装いをまとわせ、他者に作用する文脈をもった物語を作ろうと不可能な試みに挑み続けた。ビガーはマックスを相手に「語ることへの欲望」に繰り返し突き動かされている。ビガーにとって、語ることにこそが生きることに直結しているのである。しかし、彼が本当に語りた言葉が語られることはない。ビガーはマックスに “Mr. Max, how can I die !” (424) と必死に問いかける。語るができずには、生きていくことにはならない、そのために死ぬこともできない、と言うビガーが見せる、言葉を発することへの執着が、マックスに共感と恐怖を抱かせる<sup>8</sup>。

言葉を操り、そこに文脈を作り出す authority への欲求は、人間であれば誰もが持ち得る欲求といえる。しかし、この欲求を被抑圧者である黒人が抱くことは、抑圧者である白人の秩序に対する脅威となる。マックスは、ビガーに対して、白人としての恐怖を感じただけではない。「言葉」を求めれば求めるほど、「言葉」によって成り立つ世界からの隔絶がうまれるという、人間全体の置かれた状況をビガーに見出したために、恐怖を感じているのである。ここには、ライトによって「共産主義者」という思想的背景を与えられたマックスがもつ共産主義的な一体感への渴望<sup>9</sup>の対極にある、人間疎外に対する恐怖が見え隠れしている。

#### 4. 結論

政治や芸術といった「高度に具現化された表現の様式」とは、言葉を媒介にして、人間の感情と存在そのものを注ぎ込む“器”(concrete and objective form 399) であるといえる。しかし、黒人は「高度に具現化された表現の形式」を手に入れることはできないのだというマックスのセ

リフにあるとおり、その“器”をもちいるための手段としての言葉は、白人の所有のもとにある。受け入れる器のない液体のような感情と彼の存在そのものをcrystallizeし、世界において意味を持たせることへの欲求が、ビガーの行動のエネルギーであった。しかし、黒人の識字率が時代を経るごとに向上したとはいえ、デュボイスが指摘するように、生れた時から白人の支配する社会から疎外された存在の黒人は、世界から認知される言葉を持つことはない。白人にとって、奴隷制の時代から黒人に文字を教えることは法に反する危険なことであり、言語を行使する権威は白人に独占されるべきものとされてきた。だからこそ、黒人がそのauthorityを手にするのは白人にとって「体制を転覆させる行為」として抑圧されるのである。

白人にとって、ビガーが能動性をもった主体として行動しようとすることは、爆発を起こす可能性を秘めたガソリンが暗示するような、危険をはらむ試みである。作品の最後でビガーは、自分の口から発せられた言葉を、意味を持った言葉として認識している。マックスに対してビガーは以下のように、語る自分自身を認識している。

I didn't know I was really alive in this world until I felt things hard enough to kill for 'em. ... It's the truth, Mr. Max. I can say it now, 'cause I'm going to die. I know what I'm saying real good and I know how it sounds." (429、下線部は筆者)

このビガーのせりふからは、彼が「言葉」によって結晶化することのできなかつた自分の感情と存在を、死を目前にしたときに、初めて言語へと結晶化し、客観的に認識したことがうかがえる。しかし作品の結末において、投獄されたビガーとの面会に来たマックスが別れる場面では、二人の間には永遠に歩み寄ることのできない鉄の扉による隔絶が描かれている。それは、作者ライトが、自身の創作であるビガーを介しても描ききることのできなかつたものの存在を示す。言葉による自分自身の世界の創設を求めたビガーは、死という結末を迎えることでしか、「白い力」のもとで自分の生に言葉を与え、文脈を作り出すことができないのであ

る。マックスが去った後も牢屋のさく (bars 430) をつかみ続けるビガーは、死を迎える運命にあるために、もはや自らの生を crystallize することを禁じられ (bar) ている。死が人間にとって避けられないものであると考えるとき、言葉を主体的に操って文脈をもった物語を創作しながら生きていくはずの人間は、実は、常に言葉で自分の世界を作り出すことに失敗し続けている。人が、いつ訪れるか知れないが確実に訪れる死を目前にして、crystallized modes of expression からは永遠に締め出された (barred) 状態にあるということ、死刑を待つビガーは表している。

\*本稿は、2011年5月21日に開催された日本英文学会第83回全国大会（於：北九州市立大学北方キャンパス）での発表原稿に加筆修正を加えたものである。

## 注

<sup>1</sup> Richard Wright, *Native Son*. (New York: Harper, 2005). なお、以後の “How Bigger Was Born” および *Native Son* からの引用はすべてこの版を用い、ページ数は本文引用箇所後ろに括弧に入れて示す。

<sup>2</sup> 高橋正雄は、ライトが20世紀初頭のアメリカに黒人として生まれ、「その生活も文学も黒人という一点を軸にして変動し、発展してきた」（高橋3）と論じている。

<sup>3</sup> オックスフォード英語辞典によれば動詞 crystallize の意味は以下のように定義されている。

3. *fig.* To give a definite or concrete and permanent form or shape to (something of an undefined, vague, or floating character).

4. *intr.* To form (itself) into crystals, become crystalline in structure.

「3. 何か曖昧で流動的な性質のものに不変で確固とした形状を与える」という意味が、ビガーの持つ「生」を言語という確固としたもので表現したいという欲求を表わすと考える。しかし、言語が持つ支配力が目には見えなくても人に影響を及ぼすものであるとすれば、無色透明を意味するクリスタルと言語の共通点を踏まえ、「4. 構造を持ったクリスタルに結晶化する」という意味にも注目したい。

<sup>4</sup> America is inherently a “white” country: in character, in structure, in culture. Needless to say, black Americans create lives of their own. Yet, as a people, they face boundaries and constrictions set by the white majority. (America’s version of

apartheid, while lacking over legal sanction, comes closest to the system even now being overturned in the land of its invention.) (Hacker 4)

<sup>5</sup> マックスは、ビガーのベッシーに対する愛情の欠如と、肉体的な欲望の充足という目的だけが二人を結び付けていた点を根拠にして二人の関係を masturbatory な関係であったと述べている。ビガーにとってのベッシーは、“a fallow field beneath him stretching out under a cloudy sky waiting for rain” (135) という自然の一部として存在するのみで、ビガーが激しく求める a body (140) でしかない。

<sup>6</sup> ライトは、ビガーが疎外の感覚から逃れようと自分の世界を作り出そうともがき、それに失敗する様子を Over and over he had tried to create a world to live in, and over and over he had failed. (345) という一文で表わしている。

<sup>7</sup> He was trembling with excitement. In the past had they not always drawn picture for him? He could tell them anything he wanted and what could they do about it? It was his world against Jan's, and Jan was a Red. (158)

<sup>8</sup> Ana Maria Fraile Marcos はマックスが “a jeremiad to white Americans” (Marcos 128) を行う存在と位置づけている。しかし、裁判という、白人の言葉によって構築された法の場において彼の「嘆き」は無力であり、“Your honor, I ask in the name of all we are and believe, that you spare this boy's life!” (370) という彼の嘆願は叶わず、ビガーに死刑判決が下される。

<sup>9</sup> 投獄されたビガーの様子を描写するライトの筆は感傷的で稚拙さを感じるものの、ライト自身の思想が色濃く表れている。ビガーは何かを掴もうと手を伸ばすが、牢獄の壁は厚く空間には暗闇しかなかった。And in that touch, response of recognition, there would be union, identity; there would be a supporting oneness, a wholeness which had been denied him all his life.” (362) ここでライトがビガーに渴望させたものとは、言葉を介することで互いに作用し合い得られる他者との一体感である。

#### 引用参考文献

Butler, Judith. *Excitable Speech: a politics of the performative*. New York: Routledge, 1997.

———. *Precarious life: the power of mourning and violence*. New York: Verso, 2004.

Culler, Jonathan. *Literary Theory: A very short introduction*. New York: Oxford UP, 1997.

Du Bois, W. E. B. *The Souls of Black Folk*. 1903. Oxford: Oxford UP, 2007.

Fabre, Michel. *The Unfinished Quest of Richard Wright*. Trans. Isabel Barzun. 2<sup>nd</sup> ed. Urbana: U of Illinois P, 1993.

Gates, Jr., Henry Louis. *The Signifying Monkey: A Theory of Afro-American Literary Criticism*. New York: Oxford UP, 1998.

Hacker, Andrew. *Two Nations: Black and White, Separate, Hostile, Unequal*. New

York: Mcmillan, 1992.

Marcos, Ana Maria Fraile. *Native Son's "ideology of form": The (African) American Jeremiad and American Exceptionalism*. New York: Rodopi, 2007.

Michaels, Walter Benn. *The Shape of the Signifier: 1967 to the end of history*. New Jersey: Princeton UP, 2006.

Sundquist, Eric J. *To Wake the Nations: Race in the Making of American Literature*. Cambridge, MA: Belknap, 1993.

Tanner, Tony. *City of Words: American fiction 1950-1970*. London: HarperCollins, 1971.

Wright, Richard. *Native Son*. 1940. New York: Harper, 2005.

石川弘義『マスターベーションの歴史』作品社、2001年。

ウォルター・ベン・マイケルズ、三浦玲一訳『シニフィアンのかたち——一九六七年から歴史の終わりまで』彩流社、2006年。

下河辺美知子編『アメリカン・テロル—内なる敵と恐怖の連鎖』成蹊大学アジア太平洋研究センター叢書、彩流社、2009年。

佐伯彰一・武藤脩二訳『言語の都市—現代アメリカ小説』白水社、1980年。

高橋正雄『悲劇の遍歴者—リチャード・ライトの生涯—』中央大学出版部、1968年。

W.E.B. デュボイス、木島始・鯨島重俊・黄虎秀訳『黒人のたましい』岩波文庫、1992年。

日本記号学会編『聲、響き、記号（記号学研究18）』東海大学出版会、1997年。

本田創造『アメリカ黒人の歴史』岩波新書、1991年。

丸山圭三郎『言葉と無意識』講談社現代新書、1987年。

ルイ・アルチュセール、柳内隆・山本哲士訳『アルチュセールの〈イデオロギー〉論』三交社、1993年。